青年期以降の移行対象（その2）
―女性ぬいぐるみ愛好者と女子大学生の比較を通して―

王　　怡　今

Ⅰ．問　題

移行対象とは

イギリスの精神科医ウィニコット（Winnicott, D. W.）が「移行対象と移行現象」という論文を1953年に発表して以降，移行対象（transitional object）という概念は乳幼児の精神内界の発達を示す一つの現象として理解され，これまで様々な研究者によって調査がなされてきた。移行対象とは，乳幼児が肌身離さず持ち歩くことで母親の不在時に起こる著しい不安を和らげる，最初の自分ではない所有物である。具体的なものとしては，毛布，人形やぬいぐるみあるいはその他の無生物が該当する。また，この現象はほどよい（good enough）母と子の関係性の中でのみ現れる現象であり，乳幼児は母親との心理的な分離の際の不安や抑うつ感情に対する防衛として移行対象を使用する。子どもにとって移行対象とは内的世界と外的現実の間の中間領域にあり，情緒の発達を促す役割を持っている。

移行対象研究の概観

ウィニコットの影響を受け，多くの発達研究者は移行対象が幼児の健常な発達の意味を持つものとして，異なる地域でこの現象をめぐる実証的な研究を行った。Stevenson（1954）はイギリスの43人の子どもを対象に研究し，33人の子どもに移行対象を認め，Buschら（1973）はアメリカで調査した結果67.5％と高い確率を出しており，Mahalski（1983）もニュージーランドの都市部での調査で74％，Shafii（1986）はアメリカで行った調査によって80％の出現率を認めた。また精神病理学の観点からは，移行対象が出現しなかった子どもは母親の不在や母子関係の歪み，発達の遅れ，人格障害などが精神疾患につながりやすいと結論付けた研究も行われている（Stevenson，1954；Gaddini，1979；Arkema，1981）。このような研究はウィニコットの見解を裏付けることとなり，一般的な子どもの多くは移行対象を経験していると支持されている。しかし，異文化における研究として，日本での発現率は藤井（1985）31.1％，遠藤（1990）38％，井原（1997）31.7％，黒川（2004）33.4％と平均30％台の出現であり，中国や韓国も20％未満の結果（Hong，1976；井原，1997）となっており，欧米圏よりもアジア圏での移行対象の出現率は低く，都市型の文化圏のほうが移行対象が出現しやすい（Gaddini & Gaddini, 1970）ということがわかっており，移行対象の出現には文化的な要素が影響していると考えられる。

以上の結果に影響した要因として，Hong（1976，1978）は①就寝環境②就寝時の様子③授乳様式④身体接触という四つの違いを主張している。また，西洋文化の育児態度は子どもを早い時期に自立させる姿勢であるのに対し，東洋文化や農村部においては素朴な子育て様式をしているため，母親との接触時間が比較的に多

＊臨床心理学研究科 博士課程（後期）

く行われていると考えられている（井原，2006；王，2016）。つまり乳幼児を取り巻く環境やその文化に根付いた子育てに対する価値観が子育て中の母子の接触時間や就寝環境，授乳様式などの違いとして表れ，乳幼児の母親不在に伴って生じる不安を慰める存在として移行対象が出現しやすくなったということである。他には，移行対象に対する定義の違い（Gaddini & Gaddini，1970；Hong，1978；Horton，1981）や子ども自身の不安に対するストレス感受性の気質的な違い（遠藤，1991；池内・藤原，2004），入眠儀式の有無（黒川，1999），出生順位やきょうだい構成（富田，2007）などの要因も移行対象の出現に影響すると指摘されている。

移行対象の出現と性差

移行対象の出現する要因について調べる中で，子育てに対する文化的価値観の違いからアジア圏の調査ではこれまで移行対象の出現率に関して欧米圏のそれと比べて低い出現率が明らかにされてきた。しかし近年の調査において，日本での移行対象出現率が高くなったという報告がなされている（清水，2012；王，2016）。これは，日本社会の欧米化や共働き家庭・シングルマザーの増加により，子育て環境の変化やメディアの発達により子どもにとってストレスフルな場面の増加によるもの（清水，2012）と考えられ，Hong（1976）が主張した母親との「身体接触」時間の減少による結果であると考えられている（王，2016）。つまり女性の社会進出が進み，家庭内では性別役割分業がなくなりつつある中で，子どもは以前より母親と充分に触れ合う時間が少なくなり，むしろ一人で過ごす時間が増えている。それは子供にとって外の世界から取り残されるような孤独感，不安感にさらされる時間が増えることとつながる。そのため自分を慰める存在，外界へ移行していくための中間領域としての移行対象の出現が増えたと考えられる。また，森定（1999）は母親の中に移行対象に対してネガティブなイメージをもつ母親もいるため，母親を対象に調査するより本人を対象にしたほうが出現率が高くなると指摘しており，実際に本人を対象にした調査は，Shafii（1986）は80％，中根（1994）は54.9％，森定（1999）は62％，信田（2009）は85.5％，王（2016）は63％など高い出現率を報告している。このことから，本人を対象にした調査を今後取り入れていくことでより正確な移行対象の出現率を導き出せると思われる。

ウィニコット（1953）は子どもが使う移行対象は男の子が硬い対象物を使う傾向にあり，女の子はぬいぐるみや人形遊びという家族の概念とつながる対象物を使いやすいという違いがあると言及しているが，移行対象の出現そのものには男子と女子の差はないと主張した。そのため，これまで移行対象の出現にまつわる研究は多数存在しているものの，性差については言及されているものは少なく，詳細な検討をする研究はなかった。しかし**表1**に示されているように，多くの研究結果においては女子の出現率は

表1　男女移行対象発現率

調査者	調査時期	調査場所	調査対象	発現率
Shafii	1986年	アメリカ	中学生本人	女子88％男子71％
遠藤	1990年	日本	母親	女子44％男子33％
森定	1999年	日本	大学生本人	女子77％男子35％
森定	2001年	日本	中学生本人	女子48％男子24％
梅村	2002年	日本	母親	女子49％男子41％
池内・藤原	2004年	日本	母親	女子41％男子39％
山本	2008年	日本	大学生本人	女子42％男子22％
Erkolahti et al.	2009年	フィンランド	中学生本人	女子37％男子18％
王	2011年	台湾	母親	女子79％男子58％
王	2016年	日本	大学生本人	女子67％男子52％

男子より高い傾向があることがわかっており，それは移行対象の機能と関連づけて考えられることが多い。遠藤（1991）は移行対象の感触など感覚的な要素が子どもを慰めるという重要な機能を担っており，女子のほうが男子よりも生得的な感受性が強いため，移行対象への愛着が相対的に多く見られやすいと説明している。森定（1999）も移行対象は母性性の発達を促進する側面があると言及している。また，王(2011)は女子のほうが柔らかい愛着物を与えられやすい文化環境にあると男子より出現率が高くなると報告している。他にも，性的な役割意識が影響し，親の男女の育て方も異なりやすく，逞しく育てられた男子は移行対象に対しての愛着が生じにくい（王, 2016）などと考えられている。以上のことから，移行対象を調査するにあたってその国や地域の子育てに対する文化や性別による移行対象の持ちやすさが関係しており，そうした要因を考慮に入れた調査方法を検討することが重要であると思われる。

青年期以降の移行対象

乳幼児期に自分を慰める存在としてあった移行対象はその後の発達につれてどうなるのだろうか。森下（2006）は男の子の遊びの精神の核は「戦うこと」と指摘しているように，小学生になると男の子は，移行対象の代わりにミニカーや機関車，カードゲームなどに興味を抱きやすく，友達と戦いながら遊べるように常にポケットに入れるようになる。それに対して，女の子はハンカチという柔らかいものや赤ちゃん人形などを持って友達と遊ぶことがある。ウィニコット（1953）は，乳幼児期以降の移行対象を以下のように説明している。

> 健康な発達において，移行対象は“内側に入る”こともないし，それに対する感情が抑圧される必要もないということである。忘れられることもなく，悲しがられることもない。それは意味を失うのである。なぜなら，移行対象は拡散していって“内的心的現実”と“2人の個人に共通に知覚される外的世界”の間の中間領域全体に，いわば文化的分野に広がってしまうからである。（ウィニコット，1953，pp. 91；橋本訳2000，p. 7）

つまり，乳幼児期以降の移行対象は徐々に心的エネルギーの備給が撤去され，文化領域全体に拡散していくという。またウィニコット（1953）は，中間領域は乳幼児の体験の大きな部分を占め，生涯を通じて保持されると指摘し，この中間領域は生きている限り内なる現実と外なる現実を関係づけるという重荷を背負わねばならない人間にとって，重荷を軽減してくれるものとなると述べている。移行対象に対して注がれていた心的エネルギーが，拡散しさまざまな文化領域に対し配分される。そこには内なる世界と現実世界を結びつける中間領域がそのまま残り続けている。つまり形を変えていくのである。しかし移行対象を使用し続け，大切に持ち続ける人がいることもわかっている。Shafii（1986）による中学生に行った移行対象についての調査では，女子21％，男子13％が移行対象を持ち続けていたことがわかり，Erkolahti *et al*（2009）も平均14.5歳の中学生に調査を行い，28.7％が現在も移行対象を所有していると言及している。また，王（2016）は41％の大学生は未だに移行対象を使用していると報告している。このことからも，移行対象物の所持自体は決して乳幼児期特有の現象ではなく，その後も所持し続ける場合があることが分かる。Tolpin（1971）は，移行対象所持児の観察から，多くの幼児が分離個体化の終わりの時期に，毛布を所持しなくなるにもかかわらず，何人かの子どもは「何かあった時のために」毛布を取っておき，寝るときやストレスのある時に元気づけてくれるものとして使用していると報告している。以上のことから考えると，青年期以降の移行対象は常に持ち歩く必要性がなくなったとしても現実生活から突如として消えることはなく，使用の頻度が減りつつも「何かあった時のために」使用するものとして存在し

続けていると考えられる。その例としてTabin（1992）は，成人でも旅行の際などに居心地が悪くなり，特別の持ち物を旅行に持って行くことで心細い気分にならずに安心できることがあると言及している。そのように青年期以降も形を変えずに所持しつづけている移行対象も中間領域の役割を果たし続けており，生涯にわたって慰めの要素が重要な存在であるということが考えられる。

アニミズムと移行対象

移行対象という概念を考えたウィニコットは大人のファンタジーを大切にしているイギリスに生まれ，彼の理論はイメージを大切にし，保存するという，まさにイギリスの文学的風土に強く影響されている（井原，2006）。彼が残した重要な思想の中で，移行対象をはじめ中間領域，錯覚－脱錯覚など，多くのものはイメージの中で膨らませる考えであり，彼の理論を理解するためにはイメージを遊ぶ心をもつことが必要であり，大人のアニミズム思考とも関係している（王，2016）。心理学の分野において，Piaget（1929）はアニミズムを子どもが外の世界のすべての物事を生きているとか意識があると見なす現象だという。しかし，この現象は大人にも存在していることが確認されている（牧野，1992；市川，1977；布施，2004；池内，2010）。池内（2010）は大人のアニミズムを「実際に生を認めているわけではないが，無生物に対して神性や生命の存在を感じる現象」と再定義している。それは，大人がアニミズムに多様な意味を与えている可能性があるから（布施，2004）と指摘しており，この大人のアニミズム思考という考えは多くのファンタジーの世界に使われていることから移行対象の概念を理解する時にも役に立つと思われる。また日本文化の伝統的な自然観はアニミズム的であり（阿部，2002），それは日本の伝統宗教「神道の存在」が大きい（池内, 2010）としていることからも，日本人の自然やモノに対する考え方にはアニミズム思考が根付いていると考えられる。そのことからも日本の成人の移行対象を理解するために，アニミズム思考との関係を調べることで重要な示唆が得られるのではないかと思われる。

対人様式と移行対象

移行対象は「ほどよい母親」と乳児の間に生まれる産物（ウィニコット，1964）であり，牛島（1982）も母子関係が希薄である場合と濃密である場合に移行対象が発現されにくいと言及した。藤巻（2005）が大学生を対象に調査をした結果，乳幼児期に移行対象を経験した人は母子関係が良好で移行対象を経験しなかった人よりも有意に友人関係の確立が良好と報告している。従って，幼少期の愛着関係は移行対象の出現と強く関係していることが考えられ，移行対象の経験の有無が大人になってもその人の対人様式に現れていると考えられる。対人様式を測定する際に，戸田（1988）が発表した内的作業モデル（IWM）が多く用いられている。それは他者と自己の関係を測る尺度であり，乳幼児期の発達に伴い愛着対象との間での愛着が個人の中に内在化され，内的ワーキングモデルとしてその人の内部に存在する。このモデルは人生に渡って外界と関わる時に対人様式として現れるという考えである。

以上を踏まえてウィニコットらの主張と内的作業モデルを合わせて考えると，乳幼児期に母親とほぼよい関係にあった移行対象経験者はその愛着関係がその後の対人関係の基礎となり，移行対象を経験しなかった人よりも安定した対人様式を持ちやすいと仮定することができると考えられる。

Ⅱ．目　的

移行対象の出現にまつわる多くの実証的な調査や意見が発表されているが，青年期以降も移行対象を継続して使用している人についての詳細な検討は存在しなかった。そこで幼少期より移行対象を継続して使用している方を対象に調査していくことで移行対象研究の新たな視点が

得られるのではないかと考えた。

そのうえで，文化的や生得的に移行対象を持ちやすく，出現率の高い女性に対象を絞る。また，青年期以降ということで成人女性にアンケートを行う。そこで得られたデータと2016年に行った女子大学生（王，2016）の移行対象の調査結果を比較，検討し，その差を見出していくことを目的とする。またここでは，既存研究の知見に基づいて導出した下記1，2の仮説の検証を中心に，移行対象のアニミズム思考および対人様式との関連について検討していくことにする。

「仮説1：青年期以降の移行対象の継続にはアニミズム思考が強く影響しているだろう」

「仮説2：青年期以降の移行対象の継続者はより対人様式が安定しているだろう」

仮説1について，青年期以降の移行対象継続者のアニミズム尺度の下位尺度ごとの結果がその他と比べて高いと考えられる。仮説2について，青年期以降の移行対象継続者はIWM尺度の下位尺度においてその他と比べて，安定尺度の傾向が高いと考えられる。

なお，本調査を行う際に，Gaddini & Gaddini（1970）が先駆物と主張した手や指といった乳幼児自身の身体の一部や母親の身体の一部，おしゃぶり，哺乳瓶等を移行対象から除外し「幼い頃から持ち続けて，自己を慰める機能をもつ愛着物」と定義して調査を行った。

Ⅲ．方　法

調査対象者

今後の基礎資料とするため青年期以降も移行対象を所持し，使用している女性のデータを多く収集できるよう，調査対象は比較的移行対象を所持しているであろうと思われる集団を選出し，調査を依頼した。そのため，NPO法人主催のぬいぐるみ愛好者向けのイベントに参加した76名を対象に質問紙調査を行った。そのうち，未回答項目等によって2名の回答と男性14名の回答を分析対象から除外し，最終的に女性の協力者60名（平均年齢31.53 ± 14.5歳）を分析対象とした。

調査期間

2015年3月のイベント参加者に調査の協力を依頼し，その場で回答してもらい回収した。

質問紙内容

アニミズム思考に関する質問項目は池内（2010）が作成した成人用アニミズム尺度を使用した。内的作業モデル（internal working model：以下IWM）の質問項目は戸田（1998）が発表した成人の内的作業モデル尺度を使用した。

Ⅳ．結　果

移行対象の出現率

移行対象を経験した成人女性（以下，ぬいぐるみ愛好者という）は80％（60名中48名）であった。女子大学生を対象に調査した結果67％（303名中203名）と高い出現率が見出され（王，2016），本研究の結果においても同様に高い傾向が見られた。また，青年期以降あるいは現在も移行対象を所持し，使用していると回答したぬいぐるみ愛好者は56.3％（48名中27名）と高い出現率であり，女子大学生を対象とした調査結果では42％（203名中85名）であった（王，2016）。

移行対象の分類と内容

移行対象の経験の有無と使用時期から，調査対象者を「移行対象経験あり」，「移行対象経験なし」，「移行対象継続」の3群に分けた。そのうち，「移行対象あり」群と「移行対象継続」群が具体的に使用した移行対象の項目をそれぞれ**表2～表4**で表示した。なお，これらのカテゴリーに分類した際，移行対象を複数記入した回答者については各々の項目を1つとして加算している。

表2～表4で示したように，ぬいぐるみ愛好者の「移行対象継続」群はぬいぐるみという回答が一番多く全体の72％（N = 21）を占めた。

表2　ぬいぐるみ愛好者「移行対象あり」群の具体的内容

移行対象	人数
ぬいぐるみ	13
タオル	5
毛布・ブランケット	3
人形	1
お布団	1
合計	23

表3　ぬいぐるみ愛好者「移行対象継続」群の具体的内容

移行対象	人数
ぬいぐるみ	21
タオル	4
毛布・ブランケット	2
人形	1
まくら	1
合計	29

表4　女子大学生「移行対象継続」群の具体的内容

移行対象	人数
ぬいぐるみ	58
タオル	20
毛布・ブランケット	13
まくら	5
布団	4
人形	2
合計	102

また女子大学生の「移行対象継続」群においてもぬいぐるみという回答が一番多く，全体の57％（N＝58）を占めた。これを統計的に検討した結果，ぬいぐるみ愛好者の「移行対象継続」群は女子大生の「移行対象継続」群よりもぬいぐるみの使用率が有意に高いことが分かった（$\chi^2 = 4.91$，$df = 1$，p.＜05）。また，ぬいぐるみ愛好者の「移行対象継続」群と「移行対象あり」群はともにぬいぐるみを移行対象として使用していた人が最も多く，「移行対象あり」群は全体の57％（N＝13）を占めた。統計的に検討した結果，ぬいぐるみ愛好者の「移行対象継続」群は「移行対象あり」群より有意にぬいぐるみの使用率が高いことが分かった（$\chi^2 = 4.91$，$df = 1$，p.＜05）。

アニミズムとIWM尺度

「移行対象経験あり」，「移行対象経験なし」，「移行対象継続」の3群からアニミズム尺度とIWM尺度の得点を算出し，下位検定を行った。アニミズム尺度は池内（2010）が行った分析方法に従って，アニミズム尺度の項目を「自然の神格化」，「所有者の分身化」，「所有物の擬人化」の3つの下位尺度に分け，3群から得られたデータを用いて一要因分散分析を行った（**表5，表6**）。ぬいぐるみ愛好者の結果では，主効果，交互作用ともに有意な差はみられなかった（順に$F(2, 57) = 0.02$，$F(2, 57) = 1.80$，$F(2, 57) = 1.66$，すべて*n.s.*）。

また，ぬいぐるみ愛好者と女子大学生の結果（王，2016）を比較するために，二要因分散分析を行った（**表5，表6**）。その結果，アニミズム尺度の下位尺度「所有物の擬人化」において，ぬいぐるみ愛好者は女子大学生よりも平均値が有意に高かった（$F(1, 357) = 11.98$，p＜.001）。また，「自然物の神格化」と「所有物の分身化」について，ぬいぐるみ愛好者は女子大学生よりも平均値が高い傾向があった（順に$F(1, 357) = 3.51$，p＜.10，$F(1, 357) = 3.16$，p＜.10）。

また，移行対象使用経験の3群をIWMの下位尺度「安定尺度」，「回避尺度」，「アンビバレント尺度」ごとに分けて，一要因分散分析を行った（**表7，表8**）。ぬいぐるみ愛好者の結果において，主効果，交互作用ともに有意な差はみられなかった（順に$F(2, 57) = 0.15$，$F(2, 57) = 0.04$，$F(2, 57) = 0.57$，すべて*n.s.*）。ぬいぐるみ愛好者と女子大学生の結果（王，2016）を比較するために，二要因分散分析を行った（**表7，表8**）。その結果，IWM尺度の3つの下位尺度「安定尺度」，「回避尺度」，「アンビバレント尺度」のすべてにおいて，ぬいぐるみ愛好者と女

表５　ぬいぐるみ愛好者のアニミズム尺度の得点平均値と標準偏差

移行対象（N=60）	所有者の分身化	所有物の擬人化	自然物の神格化
	M±SD	M±SD	M±SD
移行対象経験なし(12)	12.33±1.23	19.33±1.50	11.33±2.27
移行対象経験あり(21)	11.62±2.36	18.00±4.57	11.48±1.86
移行対象継続(27)	12.67±1.57	19.89±3.36	11.41±2.00

表６　女子大学生のアニミズム尺度の得点平均値と標準偏差

移行対象（N=303）	所有者の分身化	所有物の擬人化	自然物の神格化
	M±SD	M±SD	M±SD
移行対象経験なし(100)	11.17±2.30	15.63±4.15	10.29±2.96
移行対象経験あり(118)	11.68±2.06	16.75±3.89	10.38±2.78
移行対象継続(85)	12.12±1.98	18.94±3.50	11.26±2.84

表７　ぬいぐるみ愛好者のIWM尺度の得点平均値と標準偏差

移行対象（N=60）	安定尺度	回避尺度	アンビバレント尺度
	M±SD	M±SD	M±SD
移行対象経験なし(12)	22.00±3.95	19.00±4.45	20.25±4.65
移行対象経験あり(21)	21.14±4.07	18.86±3.72	21.43±3.88
移行対象継続(27)	21.67±5.28	18.63±3.97	22.15±6.14

表８　女子大学生のIWM尺度の得点平均値と標準偏差

移行対象（N=303）	安定尺度	回避尺度	アンビバレント尺度
	M±SD	M±SD	M±SD
移行対象経験なし(100)	20.33±4.52	18.82±4.18	22.44±4.55
移行対象経験あり(118)	21.33±4.21	17.85±4.05	21.82±5.30
移行対象継続(85)	21.89±4.30	19.54±4.55	22.80±5.16

子大学生との間に有意差は見られなかった（順に$F(1, 357) = 0.41$，$F(1, 357) = 0.22$，$F(1, 357) = 2.08$，すべて$n.s.$）。

Ⅴ．考　察

本研究は女性のみのデータを使用し，移行対象の使用経験によるアニミズム・対人様式などの違いについて検討を試みた。以下，主な結果について考察していきたい。

移行対象の内容と出現

今回の結果からぬいぐるみ愛好者の移行対象出現率は80％であり，女子大学生（王，2016）と同じく高い傾向であることが分かった。これまでの日本での移行対象の出現率平均30％から比べるとかなり差があることがわかった。これは前述したように，日本社会における子育て環境の変化によるものと考えられる。また，ぬいぐるみ愛好者は移行対象としてぬいぐるみを使用している人が一番多く，次いでタオルや毛布など柔らかい素材のものを使用していたことがわかった。この結果に関しては，ウィニコット（1953）の主張にあるように，女子のほうが柔らかくて，家族的な概念なものを使用しやすいという見解と一致しているといえる。他の研究においても似たような結果が見出された（森定，1999；池内・藤原，2004；王，2011；王，2016）。ぬいぐるみ愛好者の移行対象出現率がこれまでの調査の結果より高く，ぬいぐるみが

最も使用されていたものであることがわかった。そのことについて考察する。調査の中である被験者は移行対象のぬいぐるみを「モノ」で例えた質問紙の項目に嫌悪感を抱く人もいたり，「モノ」に対しての定義に戸惑いを感じるため回答に困る人がいた。井原ら（2006）は，ぬいぐるみなどの移行対象は人格をもったものとして扱われる傾向があると言及しており，池内（2014）もモノは時にかけがえのない家族であったり，大切な友人であったりすると述べている。使用状況の調査の中でも実際に「移行対象あり」群の人は，「一人遊びの相手」「寝る時はいつも一緒でした」といった友人や仲間要因としての回答することが多く，「移行対象継続」群は「一緒に生活（暮らし）している」「出かける時にこっそり連れていったり，写真を撮ったりする」といった家族的な要因と思われる答えが多く見られた。またある高齢の被験者は「私は幼い頃にぬいぐるみというものが存在しなかったので，使う機会がなかったけど，娘が小さい頃からぬいぐるみが大好きで，私と会話する時にぬいぐるみを通して話したりしていることが多くなり，ぬいぐるみは私と娘の間に常に存在しているし，会話を膨らませてくれるなど無くてはならない家族の一員だと思っている」と語った。つまり移行対象を持つ人にとって，その対象物は「モノ」という認識ではなく，家族や友人，仲間として「生きている者」という認識である。以上のように，ぬいぐるみ愛好者のぬいぐるみを移行対象として使用した人は移行対象を擬人化し，まさに「家族の一員」や「友達」としてみなしている傾向があると考えられる。そのためにヒトに投影されやすく，擬人化されやすいぬいぐるみが移行対象として多く出現したと考えられる。また本研究の調査はぬいぐるみ愛好者の集うイベントで行った調査であるため，ぬいぐるみへの親和性も高く，元々ぬいぐるみが“好き”という集団を対象に行った調査ということや移行対象の使用者に直接アンケートを行う方法を取ったことが移行対象としてぬいぐるみを使用していた人の割合が高くなる結果に繋がったと考えられる。

アニミズム思考と対人様式についての検討

今回の結果はぬいぐるみ愛好者の移行対象経験の有無によるアニミズムとIWM尺度の違いに関していずれも有意な差がみられなかった。また女子大学生（王，2016）と下位尺度ごとに比較した結果においても有意な差は見られず，本研究の目的であった移行対象使用による対人様式およびアニミズム思考の影響は見られなかったことになる。その結果を踏まえ，移行対象の青年期以降の使用に至る長期使用の意味について考察していきたい。

青年期以降の移行対象継続とアニミズム思考

まず，移行対象の使用経験によるアニミズム思考に有意な差が見られなかった結果を考えると，「仮説1の青年期以降の移行対象継続群にはアニミズム思考が強く影響している」は実証されなかったことになる。ぬいぐるみ愛好者の3群間の平均値と標準偏差を比較しても大きな差は見られず（**表5**），ぬいぐるみ愛好者は，移行対象の有無に限らず，アニミズム思考が平均的に高く，またぬいぐるみ愛好者全体のアニミズム思考が女子大学生より高い傾向がないとは言いきれず，「所有物の擬人化」においては差が見られた。今回はぬいぐるみ愛好者という集団で調査を行ったため移行対象の経験とは関係なく，被験者全員がぬいぐるみに対する親和性が高かったと思われる。ぬいぐるみ愛好者はぬいぐるみをまるで「家族の一員」や「友人」のように人格化していることが，使用状況の調査の中でも明らかであり，ぬいぐるみという「モノ」に対し，まるで命が宿っているように認識していることからもアニミズム思考が強いことが覗える。加えて，そうした命が宿ったモノとの関わりの中で，ぬいぐるみ愛好者のぬいぐるみに対する親和性は相対的にアニミズム思考を高めたのではないかと考えられる。そのため女子大生のアニミズム思考より高い傾向が認められたのではないだろうか。日本人には昔か

らアニミズム的自然観をもち（山縣，1999），モノを大切にして長く使う（庄司ら，2014）文化が根付いている。ぬいぐるみを大切に扱ってきたぬいぐるみ愛好者だからこそ，ぬいぐるみという「モノ」に命を感じ，アニミズム思考が育っていったのではないだろうか。また，山縣（1999）がアニミズム思考の強さは多くの研究において加齢によりさらに高まると結論づけたものを支持する結果となったともいえる。それは自ら長い人生経験のうえに立ってたどり着いた境地の違い（山縣, 1999）であるとしている。このように，年齢による影響も考えられる。

青年期以降の移行対象継続者の対人様式

移行対象の使用経験によるIWMに有意な差が見られなかった結果を考えると，「仮説2の青年期以降の移行対象継続者は対人様式が安定している」は支持されなかったといえる。つまりIWMにおいても移行対象の使用経験による対人様式の違いを統計的に見出すことができなかった。この結果について考察してみたい。Erikson（1963）の発達理論からぬいぐるみ愛好者の発達の課題を考えると，女子大学生が青年期で重要な課題が自我同一性の確立であるのに対し，成人期の課題は親密性と世代性である。この二つを達成するために他者との関係性が重要となる。つまり，成年期の女性は獲得した自我同一性をもとに現実生活の中で他者と親密な関係を築けるかが大切になってくる。ここに移行対象の使用がどんな影響を及ぼしているのか。井原ら（2006）は移行対象との関わりが対人関係のシミュレーションやイメージする力を発揮する機会になると考えている。青年期以降も移行対象を所持し続ける人はこうして移行対象と対人的なシミュレーションをしながら，対人的に安定を図り，現実での傷つきが移行対象との間で慰められ，その上で現実の他者と関わっていくと考えられる。今回の調査の結果を踏まえると，ぬいぐるみ愛好者の移行対象経験者には対人様式において際立った特徴は見られなかったが，それよりも移行対象の慰めの機能により内的な安定性を得られているのではないかと考えられる。移行対象との関係は対人様式の在り方を決めるものではなく，他者との関係の取り方からくる傷つきや不安を慰め，心の安定を図ったり逃避する場所としての機能を果たしているのではないかと考えられる。また岡本（1997）は成人期女性のアイデンティティ発達を「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」と分類し，両者が相互に影響を及ぼしながら，同等の重要性をもつと指摘している。つまり，親密性段階では他人と交流し，体験を共有したり，お互い尊重しあうことでより成熟した関係を築きながら，個としてのアイデンティティが成長，発達していく。移行対象はそうした親密性を養う役割を果たしていたのではないだろうか。そして，世代性の段階で他人の世話や成長を助けながら他者の役に立つことを体験し，自己確信や自信をつけていく。成人期の女性はこうして自己から他者へ関心をもち，他者から自己に繋がり，結果的に自己と他者の関係が良いバランスとして保っていくこととなるともいえる。また，成人期の女性は社会で色々な経験をし，職場や家庭，ママ友や近所の付き合いなど，さまざまな人間関係のなかで挫折を乗り越えながら成熟した対人関係様式を構築してきたため，移行対象経験の要因による対人様式の影響が見出されにくくなる結果となったと考えられる。

その他，今回調査で得たサンプル数は全体的に少数であるため，統計的に有意な差を見出すことの難しさがあると考えられる。サンプル数を増やして，さらなる検討の余地があると思われる。

青年期以降の移行対象について

ここまでに移行対象を持ち続ける人の特徴について考察してきた。以下は，移行対象の所持という「愛着物をもつ」ことの意味について触れていきながら，今回の結論をまとめていく。

移行対象を長く所持し使用し続けることは，長く愛着物をもつことである。後藤ら（2011）

はモノに抱く愛着感について調査を行い，その結果の一つは愛着物を持つ人はそのモノとの繋がりを強く意識しており，そのモノはその人にとって「成長の一因」となる存在であり，ある目的を遂行する際に行動を共にする「パートナー」のような存在であることを示している。松本ら（2003）の研究では，人形型玩具に対して肯定的評価・愛着感情を感じた中高年ユーザに関して，玩具が人工物であると認識しつつ，同時に共存者としても認識していること，また，自らの心身状態の改善と対人活動の広がりにつながる可能性をみている。庄司ら（2014）はモノの意味について研究し，モノが単に物理的な対象ではなく，人は愛着を感じるモノとの相互作用によって自己の存在や他者との関係性に大きく影響する可能性があり，モノへの愛着が生じることで人の自己の発達に大きな影響を及ぼすことを報告している。以上のように，「モノ」は所有者にとって形や持つ機能以上に共存者として存在する意味があり，愛着物が常に存在しているということはその人にとって成長や発達的に肯定的な影響を及ぼしている。また感情面に働きかけやすく，対人的な領域の広がりにも効果が見られることが考えられる。

今回，移行対象の調査対象を青年期から成人期の女性にまで広げた。これまで移行対象の研究において女性のデータのみを扱い分析されているものはなかった。この点から移行対象研究に新たな研究の方向性をもたらしたといえる。また，長期にわたる移行対象の使用に対しての執着心は何らかの精神病理と結びつけて考えられることが多かった（池内，2014；Mahler, 1963）が，むしろ個人の成長，発達的な面や対人関係に肯定的な評価があることはこれまでの研究でも示唆しており，移行対象の長期間における保持が病的現象であるとは一概に言えないのではないかと考えられる。今後，移行対象継続者については量的調査では測れない質的な要素をさらに突き詰めて検討していく必要があると思われる。

参考文献

阿部　一（2002）．現代日本文学に見られるアニミズム的自然観の位相空間モデル　東洋学園大学紀要，10，138-148.

阿部哲郎（2006）．乳幼児期の移行対象が青年期の自己愛傾向に及ぼす影響　法政大学大学院紀要，56，281-282.

Arkema, P.H. (1981). The borderline personality and transitional relatedness. *The American Journal of Psychiatry*, 138 (2), 172-177.

Busch, F., Nagera, H., McKnight, J., & Pazzarossi, G. (1973). Primary transitional objects. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 12, 193-214.

遠藤利彦（1989）．移行対象に関する理論的考察―特にその発現の機序をめぐって　東京大学教育学部紀要，29，229-241.

遠藤利彦（1990）．移行対象の発生因的解明――移行対象と母性的関わり――　発達心理学研究，1 (1)，59-69.

遠藤利彦（1991）．移行対象と母子間ストレス　東京大学教育学部紀要，39，243-252.

遠藤由美（2000）．青年の心理――ゆれ動く時代を生きる――　サイエンス社.

Erikson, E.H. (1963). *Childhood and society*. New York: Norton　仁科弥生（訳）(1980)．幼児期と社会　みすず書房.

Erkolahti, R., & Nystrom, M. (2009). The prevalence of transitional object use in adolescence: is there a connection between the existence of a transitional object and depressive symptoms? *European Child & Adolescent Psychiatry*, 18 (7), 400-406.

藤井京子（1985）．移行対象の使用に関する発達的研究　教育心理学研究，33，106-114.

藤巻英徳（2005）．乳幼児期の移行対象と青年期における自立　法政大学大学院人間社会研究科紀要，54，346.

布施光代（2004）．生物概念と生命概念の階層構造　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要，51，215-222.

Gadini, R., & Gadini, E. (1970). Transitional objects and the process of individuation. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 9, 347-365.

後藤真一・椎塚久雄（2011）．モノにまつわる体験とモノに抱く愛着感との関連　工学院大学研究報告，100，97-103.

Hong, K.M. (1978). The transitional phenomena: A theoretical integration. The Psychoanalytic Study of the Child, 33, 47-79.

Hong, K.M., & Townes, B.D. (1976). Infant's attachment to inanimate objects. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 15, 49-61.

Horton, P.C. (1981). *Solace: The Missing Dimension in Psychiatry*. The University of Chicago Press. 児玉憲典訳（1985）．移行対象の理論と臨床――ぬいぐるみから大洋体験へ　金鋼出版.

市川千秋（1977）．老人のアニミズムに関する研究　三重大学教育学部研究紀要，28，57-61.

井原成男（1996）．ぬいぐるみの心理学――子どもの発達と臨床心理学への招待　日本小児医事出版社.

井原成男・橋爪千恵子・日浅美由紀・森定美也子・吉野美緒（2006）．移行対象の臨床的展開――ぬいぐるみの発達心理学　岩崎学術出版.

井原成男・木村涼子（1986）．移行対象の発達的意味――移行対象がさまざまな現れ方をした3症例からの検討　小児の精神と神経，26，57-63.

井原成男・汪　玲・庄司順一（1997）．移行対象と気質の日中比較　日本教育心理学会総会発表論文集，39，170.

池内裕美（2010）．成人のアニムズム的思考：自発的喪失としてのモノ供養の心理　社会心理学研究，25 (3)，167-177.

池内裕美（2014）．人はなぜモノを溜め込むのか：ホーディング傾向尺度の作成とアニミズムとの関連性検討　社会心理学研究，30 (2)，86-98.

池内裕美・藤原武弘（2004）．移行対象の出現・消失に関する社会心理学的規定因の検討：生育環境と夫婦間ストレスの視点から　社会心理学研究，19，184-194.

木野和代・岩城達也（2008）．贈り物に付与された価値とモノへの愛着――贈り主による認知の分析――　感情心理学研究，16，73-86.

北川歳昭（2005）．発達段階と発達課題　平山諭・鈴木隆男（編）（2005）発達心理学の基礎Ⅰ　ライフサイクル　ミネルヴァ書房 pp. 63-67.

黒川嘉子（1999）．幼児の就眠時行動の心理学的考察――狭義の移行対象論から自己調節論へと視点をうつして　京都大学大学院紀要，45，342-352.

黒川嘉子（2004）．移行対象・移行現象に関する二つの視点　心理臨床学研究 22 (3)，285-296.

Mahler, M.S. (1963). Thoughts about development and individuation. *Psychoanalytic Study of the Child*, 18, 307-324.

牧野圭子（1992）．大人におけるアニミズム的イメージの持ちやすさについて　日本教育心理学会総会発表論文集 34，70.

松本斉子・平井葉子・往住彰文（2003）．共存的人工物としての人形型玩具　認知科学，10，385-400.

森定美也子（1999）．乳幼児期から青年期までの移行対象と慰める存在　心理臨床学研究，16，582-591.

森定美也子（2001）．思春期における慰める存在――移行対象の観点から 19 (5)，535-541.

森下みさ子（2006）．児童学からの出発：現代おもちゃと子どもの世界の文法（その一）：性差（セクシャリティ）／仮想現実（ヴァーチャルリアリティ）／感受性（センシティブティ）幼児の教育，105 (7)，40-48.

中根淑子（1994）．移行対象経験と青年期の母親イメージとの関係　日本教育心理学会総会発表論文集，36，97.

信田　敦（2009）．移行対象・移行現象からみる大学生における分離不安に関する研究　心理相談センター年報　4，21-28.

岡本裕子（1997）．中年からのアイデンティティ発達の心理学　ナカニシヤ出版.

岡本裕子（編）（1999）．女性の生涯発達とアイデンティティ――個としての発達・かかわりの中での成熟　北大路書房.

大元　誠・秋山　弥（1988）．「感」的認識としてみたアニミズムに関する発達的研究　佐賀大学教育学部研究論文集，35 (2)，59-69.

Piaget, J. (1929). The child's conception of the world. London: Routledge & Kegan Paul. 大伴茂（訳）（1955）．児童の世界観――ピアジェ臨床児童心理学Ⅱ　同文書院.

Shafii, T. (1986). The prevalence and use of transitional objects: a study of 230 adolescents. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 25, 805-808.

清水幸子（2012）．移行対象経験が青年期の対人様式や自尊感情に与える影響　人間科学研究，

25 (1), 150.

庄司市子・簡　浚祐・崔　玉芬・山田有芸・新井雅・江角 周子（2014）.「モノの意味」に関する研究　筑波大学発達臨床心理学研究, 25, 39-48.

園田雅代・平木典子・下山晴彦（2007）. 女性の発達臨床心理学　金鋼出版.

Stevenson, O. (1954). The first treasured possession. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 9, 199-217.

Tabin, J.K. (1992). Transitional objects as objectifies of the self in toddlers and adolescents. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 56, 209-220.

寺内文雄・久保光徳・青木弘行・橋本英治（2005）. 愛着の発生に関わる因果モデルの構築　デザイン学研究, 51, 45-52.

戸田弘二（1998）. 内的作業モデル尺度　堀　洋道・山本真理子・松井　豊（編）（1994）心理尺度ファイル――人間と社会を測る――　垣内出版 pp. 109-114.

Tolpin, M. (1971). On the beginnings of a cohesive self, an application of the concept of transmuting internalization to the study of the transitional object and signal anxiety. *Psychoanalytic Study of the Child*, 23, 316-352.

富田昌平（2007）. 乳幼児の移行対象と指しゃぶりに関する調査研究　中国学園紀要, 6, 127-138.

梅村かおり（2002）. 母親の養育意識と母子移行対象の性質に関する調査研究　静岡大学心理臨床研究, 1, 3-10.

牛島定信（1982）. 過渡対象をめぐって　精神分析研究, 26(1), 1-19.

王　怡今（2011）. 台湾における移行対象の出現・消失に関する研究：生育環境の視点から　東京国際大学臨床心理学研究科修士論文（未刊）.

王　怡今（2016）. 青年期以降の移行対象――アニミズム的思考と対人様式との関係から――　東京国際大学臨床心理学研究, 14, 1-17.

Winnicott, D.W. (1953). Transitional objects and transitional phenomena. *International Journal of Psychoanalysis*, 34, 89-97. 北山　修監訳（2005）. 小児医学から精神分析へウィニコット臨床論文集　岩崎学術出版社.

Winnicott, D.W. (1964). *Further thoughts on babies as persons. In the child, the family and the outside world*. Penguin Books. 猪股丈二（訳）（1985）：子どもと家族とまわりの世界――赤ちゃんはなぜなくの, 子どもはなぜ遊ぶの　星和書店.

山縣喜代（1999）. 現代日本女性の生き方――宗教的・倫理的価値意識と心情――　ミネルヴァ書房.

山本美知子（2008）. 移行対象が青年期の友人関係に及ぼす影響　桜美林大学大学院心理学研究科修士論文（未刊）.